様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０９０７

研究課題名（和文）報酬分配と責任分配における幼児・児童の公平観に関する発達研究

研究課題名（英文）Young children's fairness judgments on distribution of rewards and responsibilities

研究代表者
橋本　祐子（HASHIMOTO, Yuko）

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：８０２２８４２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、分配における子どもの公平観について、分配対象と年齢による違いを検討した。報酬と責任の両分配場面に適用できる分析枠組として４つの分配タイプ（均衡、均等、利己、利他）を考案した。幼稚園の年中児と年長児にインタビューした結果、どちらの場面でも、年長児は年中児に比べて利他タイプが多く、利己タイプが少なかった。両場面における分配タイプの一貫性については、年長児は一貫していた人数の方が多く、年中児はその逆だった。しかし、いずれも有意差がなかったことから、他者を配慮した分配や異なる場面に同じルールを適用する傾向が、発達あるいは個人差によるものなのかについて、年齢幅を広げて検討する課題が示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study was to examine whether there were any consistencies and age trends in children’s fairness judgments across reward and responsibility distributions. We developed a framework that can be applied to both reward and responsibility distribution contexts and conceptualized four allocation types (Equity, Equality, Self-centered, and Altruistic). Children from 4-year-old and 5-year-old classrooms were interviewed to examine whether they show consistencies in their allocation patterns across two distributions. Older children showed more Altruistic patterns and less Self-centered patterns than younger children in both distributions. A higher number of older children applied the same allocation rules to both distributions than younger children. However, because those age differences were not significant, the necessity for further study including school age children that examines whether such tendencies are due to developmental or individual differences is discussed.

研究分野：発達心理学

キーワード：公平観　道徳性発達　分配的公正　責任分配

１．研究開始当初の背景

子どもが報酬（ごほうび等）をどのように分けるのかに関する発達研究は、幼児・児童の道徳性の発達を明らかにする研究テーマの１つとして、これまで国内外で多く行われてきた。これらの研究は、どのような分配方法を公平と考えるかが年齢により異なる傾向があることを示してきた。また、近年では幼児がどのくらい利他的分配をするかを調査した研究も見られるようになった。

これらの正（報酬）の分配に関する研究に対して、負の分配と考えられる責任（負担）の分配については、夫婦間の家事・子育ての分担、温室効果ガス削減負担の国家間での分配など、多領域で議論がなされているが、幼児や児童に関する発達研究は極めて少ない。また、児童を対象とした家事の責任分配に関する発達研究はいくつかあるが、幼稚園・学校といった集団における責任の分配に関する子どもの理解を明らかにした研究は見当たらない。そこで、本研究の研究代表者の橋本と研究分担者の戸田は、幼稚園における「片付け」（使用した遊具などの共有物を整理整頓する責任を子どもが分担する日常的な活動）に着目し、責任の分配に関する幼児の公平観について研究を行ってきた。学校教育や家庭教育における片付けの指導についての研究はあるものの、「誰が片付けるのか」をめぐる公平性の問題について、子どもがどのように理解し、解決するかについては十分に取り上げられてこなかったためである。

これまでの橋本と戸田の研究では、以下の２点の研究課題が明らかになってきた。①幼児が片付けの分配をする時、利己的な分配、利他的な分配、自己責任による分配、協働による分配という４つのタイプが見られる。このような子どもの責任の分配のタイプが異なるのは、年齢によるのか、状況によるのかについてさらに検証する必要がある。②幼児・児童がどのような分配を公平と考えるかについての発達研究は、a）分配する対象が責任か報酬か、b）子どもの年齢、c）被分配者間の関係が長期的に継続するか短期的か、d）公平さを判断する時点が分配の前か後か、e）分配における公平観の発達が国や地域によってどう異なるのか、といった複数の比較軸による検討が必要である。

以上の研究課題について詳細に調査することは、幼児期から児童期にかけての道徳性の発達の様相をさらに解明することにつながる。また、子どもの発達に関するエビデンスに基づいた道徳教育や家庭教育、および文化的背景を踏まえた教育実践への新たな示唆を与えるものになる。

２．研究の目的

本研究の目的は、「片付け」という責任の分配に関する公平観の発達について、子どもがどう分配することが公平と考えるかを調査し、それを報酬の分配場面での考えと比較することによって、道徳性の発達の一側面の様相を解明することである。

(1) 国内における調査では、分配における子どもの公平観の発達について分配対象（報酬か、責任か）による違いおよび年齢による差を明らかにする。

(2) 国外においては、分配対象（報酬か、責任か）、年齢、被分配者間の関係が長期的に継続するか短期的かによる差、および国や地域による文化差を比較検討する国際共同研究の体制を構築することを目的とする。

３．研究の方法

(1) インタビュー調査（分配対象と年齢による比較）

調査協力児：幼稚園における年中児 28 名、年長児 28 名

質問内容：

①報酬の分配：自分と友だちが協力してクラス全体のために製作物を作る２つの場面（自分が製作物を多く完成した、または相手が製作物を多く完成した）を提示し、各場面において、(a)自分だけがごほうびを多くもらう、(b)相手だけがごほうびを多くもらう、(c)２人がごほうびを同じだけもらうという選択肢の中からどれを選ぶか、およびその理由を質問する。

②責任の分配：自分と友だちがクラスの共有遊具を使う２つの場面（自分だけが遊具を使って遊んだ、または相手だけが遊具を使って遊んだ）を提示し、各場面において、(a)自分だけが片付ける、(b)相手だけが片付ける、(c)２人で一緒に片付ける、の選択肢の中からどれを選ぶか、およびその理由を質問する。

(2) インタビュー調査（被分配者間の関係による比較）

調査協力児：幼稚園における年長児 42 名

質問内容：(1)の ②責任の分配と同様の内容だが、同じ調査協力児に、「友だち」の部分を(a) 顔見知り条件（顔見知りだが関係が継続しない人との分配）と(b)見知らぬ人条件（見知らぬ人との分配）に変えて説明と質問をする。

(3) 国際共同研究の基盤づくり

① ギリシャの研究者との共同研究として、(1)の②責任の分配に関する調査と同じインタビュー方法を用い、国際比較研究の予備的調査を行った。

② 香港の研究者との共同で、国際学会において「分配的公正：家族、学級、文化における発達と学習」というテーマでシンポジウムを開催した。研究交流を通して、国際比較研究に向けた協力体制づくりを行った。

４．研究成果

(1) 報酬／責任の両場面における自他間の分配パターンを分析する枠組の考案

これまでの多くの研究の蓄積によって明らかになってきた報酬の分配における子どもの公平観の発達と比較し、分配対象が異なる責任の分配場面において、子どもがどのような分配を公平と考えるかを明らかにすることが本研究の目的である。そのため、報酬と責任のどちらの分配場面にも適用できる分析の枠組みが必要であった。

また、これまでの研究の多くは、子どもの分配行動がどのように発達するかについて、公平（衡平）理論（Adams，1965）にもとづく分析がされてきた。それによると、子どもは６、７歳になると貢献度（インプット）に応じて報酬（アウトプット）を分ける衡平分配をするようになるが、４歳ごろの幼児は自分が多く報酬を得る利己的分配を、５、６歳では貢献度に関係なく均等に報酬を分ける平等分配を公正と判断するとされてきた。しかし近年では、幼児が自分と他者の間で報酬を分ける時、利己的な傾向は強いものの、他者への配慮をする利他性を見せることを示す研究が増えている。

そこで、報酬分配と責任分配の両場面に適用でき、かつ、幼児が利己的欲求と他者への配慮をどのようにとらえて分配をするのかを分析するために、自他間での分配場面における分配パターンの４つのタイプを以下のように考案した。

① 均衡タイプ：多く貢献した人に多く報酬を分配する／遊具を使った人に責任を分配する。

② 均等タイプ：貢献度や遊具の使用にかかわらず均等に報酬または責任を分配する。

③ 利己タイプ：自分が多く貢献した時は自分に多く、相手が多く貢献した時も自分に多く、または均等に報酬を分配する／相手のみが遊具を使った時は片付けを手伝わず、自分のみが使った時は相手に手伝わせる。

④ 利他タイプ：相手が多く貢献した時は相手に多く、自分が多く貢献した時は均等に、または相手に多く報酬を分配する／自分のみが遊具を使った時は自分一人で片付け、相手のみが使った時は一緒に、または自分だけで片付ける。

(2) 報酬と責任の両場面における分配パターンの一貫性と年齢による比較

幼稚園における年中児と年長児を対象に、同じ幼児に報酬と責任の両場面についてインタビューをし、上記の４つのタイプで分析した。その結果、報酬分配では、年長児は年中児に比べ利己タイプがより少なく、利他タイプがより多く見られた。しかし有意な差は見られなかった。（図１）。

また、責任分配においても、有意な差はなかったものの、年長児は年中児に比べて利他タイプがより多く、年長児には利己タイプは見られなかった（図２）。

両場面における分配タイプの一貫性を見ると、年中児では一貫していない人数の方が

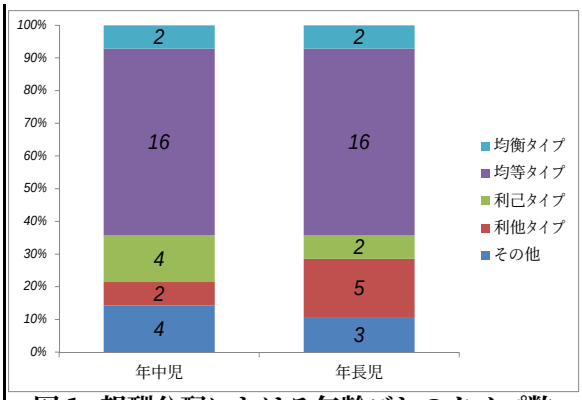


図１ 報酬分配における年齢ごとのタイプ数

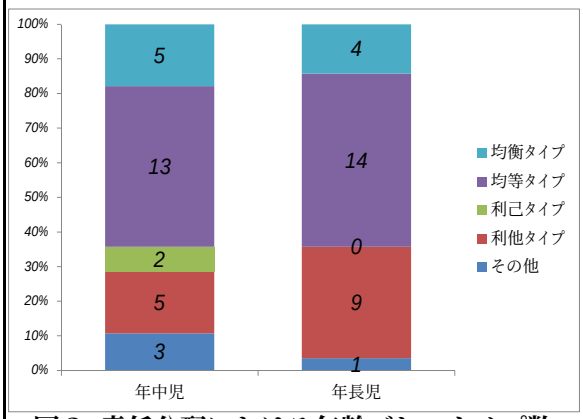


図２ 責任分配における年齢ごとのタイプ数

多く、年長児では一貫していた人数の方が多かった。分配タイプが一貫していた人数は、年中児よりも年長児が多かったが、有意な差は見られなかった（$\chi^2$ (1, N = 56)=1.81, p=.18.）（表１）。

表１ 両分配場面における分配タイプ

| 報酬分配 | 責任分配 | 年中児 | 年長児 |
|---|---|---|---|
| 均衡タイプ | | 1 | 1 |
| 均等タイプ | | 9 | 11 |
| 利己タイプ | | 0 | 0 |
| 利他タイプ | | 0 | 3 |
| 一貫 | | 10 | 15 |
| 非一貫 | | 18 | 13 |

これらの結果から、利他タイプの分配をする幼児、および両場面において同じパターンの分配をする幼児が、年長児により多く見られたものの、有意な差はなく、相手を配慮した分配行動や異なる場面に同じ分配ルールを適用する傾向が、幼稚園の年中から年長になるにつれて増えるとはいえないことが示唆された。しかし、このような傾向が年齢的な発達によるものなのか否かを検証するためには、さらに年齢を広げて、児童も対象に含めた調査をする必要がある。

以上の調査結果は、国際学会において発表

し、論文を国際学会誌に投稿中である。
　また、研究期間中に、以上に記した課題が明らかになったことから、当初予定になかった縦断的研究を計画し、調査を開始することに繋がった。縦断的研究によって、同じ子どもを幼児期から児童期まで追跡調査することで、利他的な分配行動や両場面における分配パターンの一貫性が、発達によるものなのか、あるいは個人差によるものなのかを解明できる可能性がある。

(3) 幼児の分配における公平判断に関する研究上の課題の整理
　上記の分析枠組の考案およびインタビュー調査と並行して、幼児の分配における公平判断に関する研究上の課題について整理し、論文として発表した。
　これまでのインタビュー調査による研究の多くは、調査協力者に仮想場面を見せ、２者間においてどのように対象を分配するのかを質問するものである。その場合、「今、ここ」での公平性の判断について問うものであり、被分配者の関係はその場限りのものを前提としているといえるだろう。しかし、橋本と戸田による調査において、どのように責任を分配するかの判断を、今ここでの片付け場面だけで完結させるのではなく、それ以前の片付け場面や幼稚園における他の場面も考慮に入れて行っている幼児が少数ではあるが存在した。
　この点から、自他間における公平性を考える時、「お互いさま」に示されるような継続的で互恵的な関係性や、「情けは人のためならず」に示されるように、巡り巡って自分に返ってくることを考慮して判断している可能性が考えられる。このような従来の研究では捨象されてきた、公平性の判断の背景にある時間軸やコミュニティの存在を考慮することは、公平研究における生態学的妥当性を高めることに繋がるだろう。また、幼児がこのような関係性を考慮して公平判断をしている可能性についても今後さらに詳細に検証する必要がある。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計２件）
①橋本祐子、熊木悠人、滑田明暢、勝間理沙、小林将太、野本玲子、戸田有一、道徳性発達研究の最新課題と実践への見通し：Killen, M., & Smetana, J.G. (Eds.) 2014 “Handbook of Moral Development (2nd ed.)”をめぐって、エデュケア、査読有、35 号、2014、45-49

②戸田有一、橋本祐子、報酬・責任の分配における幼児の公平判断：返報性・巡報性・ケアの考慮、道徳性発達研究、査読有、8 巻、2013、1-9

〔学会発表〕（計４件）
①Yuko Hashimoto, Mun Wong, Akinobu Nameda, Yuto Kumaki, & Yuichi Toda. Distributive justice: Development and learning in families, classrooms and cultures, The Seventh Asian Conference on Education 2015 年 10 月 24 日、神戸芸術センター（兵庫県神戸市）

②橋本祐子、戸田有一、幼児期の報酬分配と責任分配における公平判断の発達、日本発達心理学会第 26 回大会ラウンドテーブル「公正判断研究の最前線」（話題提供者）、渡邊弥生（指定討論者）2015 年 3 月 21 日、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）

③Efthymia Penderi, Galini Rekalidou, & Yuko Hashimoto. The distribution of clean-up jobs in the kindergarten: Replication of a Japanese study in Greece. The 3rd Biennial European Association for Research on Learning and Instruction, Conference on SIG 5 Learning and Development in Early Childhood. 2014.8.26. (Jyväskylä, Finland)

④Yuko Hashimoto & Yuichi Toda. Distributive Justice: Young children’s fairness reasoning on the allocation of rewards and burdens. The 16th European Conference on Developmental Psychology. 2013.9.5.(Lausanne, Switzerland)

６．研究組織
(1)研究代表者
　橋本　祐子（HASHIMOTO, Yuko）
　関西学院大学・教育学部・教授
　研究者番号：８０２２８４２８

(2)研究分担者
　戸田　有一（TODA, Yuichi）
　大阪教育大学・教育学部・教授
　研究者番号：７０２４３３７６

　渡邊　弥生（WATANABE, Yayoi）
　法政大学・文学部・教授
　研究者番号：００２１０９５６